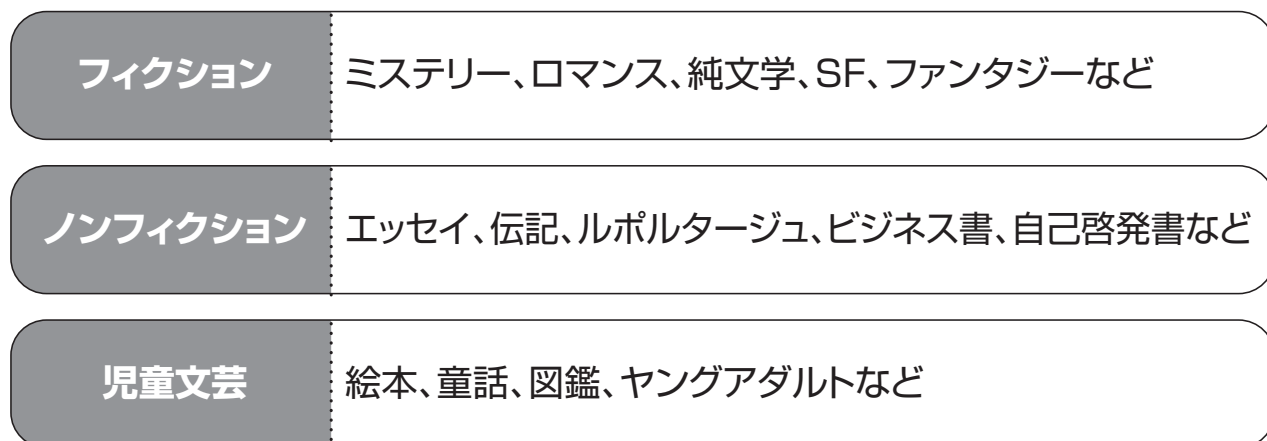
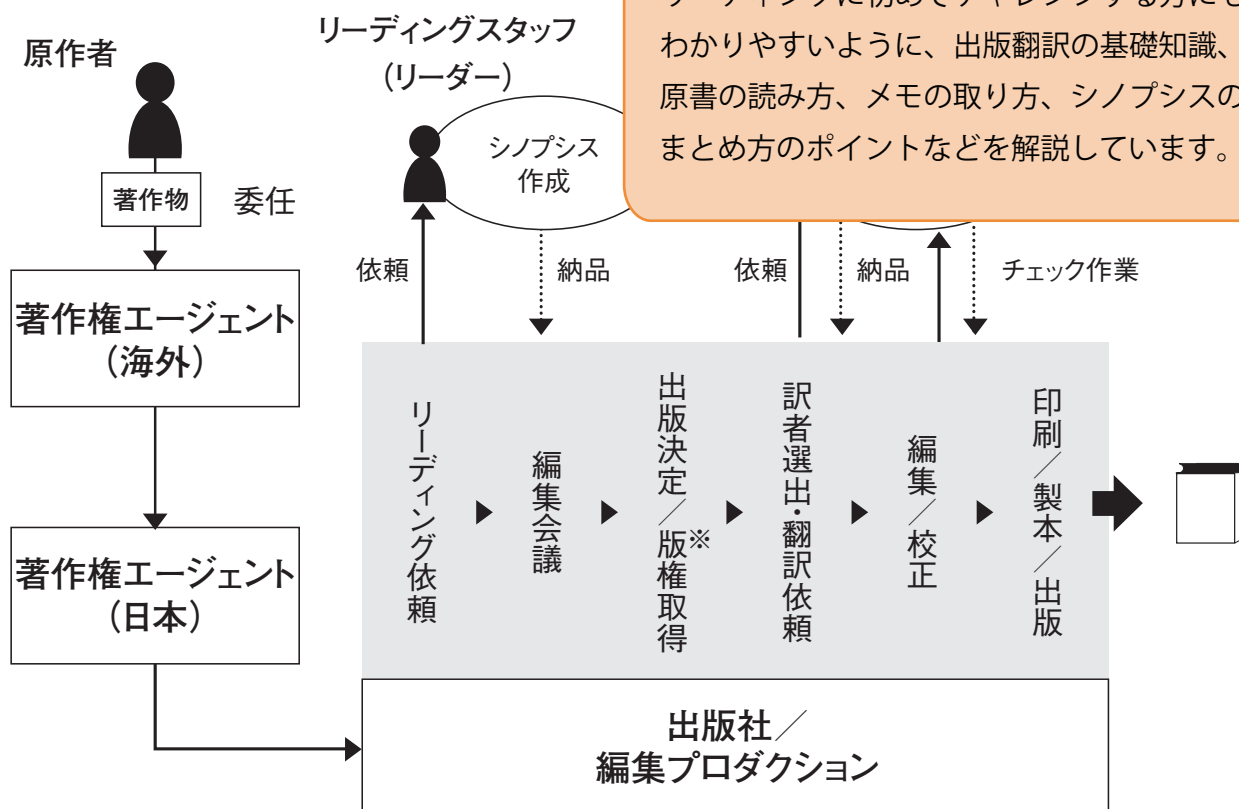


## ■ 出版翻訳の基礎知識

出版翻訳とは、海外の著作物を日本で出版することを目的に行われる翻訳です。出版翻訳の対象となる著作物は、主に以下のジャンルに分かれ、日本で翻訳出版されるまでの流れは下図のようになります。



### ● 出版翻訳の仕組みと仕事の流れ



#### ※版權とは？

出版社が主に著作権エージェントを通じて取得する出版権のことを、通称「版權」と呼ぶ。

## ■ リーディングの仕事

リーディングとは、原書を読み、あらすじや感想・評価をシノプシス(またはレジюме、こうがい梗概とも呼ばれる)にまとめる仕事で、主に出版社や編集プロダクションが、翻訳者や翻訳学習者に依頼します。また、リーディングを行う人をリーディングスタッフ、またはリーダーと呼びます。

あらすじ、評価、類書との相違点、日本のマーケットに合う作品かなどをまとめたシノプシスをもとに、その本を出版するかどうかを検討するので、リーディングは非常に重要な仕事です。また、出版社からは「シノプシスには、作品の理解力や文章力が如実に表れるので、将来翻訳を依頼するかどうかのひとつの判断基準になる」という声も聞きます。

リーディングの経験を積むと、原書の構造やストーリーの流れ、著者のメッセージなどを正確につかむ力が向上しますので、翻訳も上達していきます。

## ■ 出版市場の動向を知ろう

出版翻訳やリーディングの仕事をするには、市場の動き、各出版社の傾向などを知っておくことが大切です。こうした情報を手に入れるには、主に以下のような手段があります。

### ①書店に赴く

書店の売り場の様子をじっくり観察すると、出版社や書店の動向を知ることができます。たとえば、目立つ場所に平積みになっていれば、今売れ筋の本ということになりますし、ポスターやポップを見れば、出版社や書店が力を入れている本がどれかもわかります。

また、先週平積みだったものが、今週は棚に1冊しかないといったように、書店の商品展開はめまぐるしく変わります。そのため、書店での取扱期間が長い書籍はよく売れているということになります。こうした本の売れ行きについてもチェックしておきましょう。

## ■ シノプシスのまとめ方

シノプシスを作成するにあたって重要なことは、編集者がその作品を翻訳出版するか否かの判断材料にできるよう、作品の内容を正確かつ簡潔に伝えることです。客観的に読んで、日本で翻訳出版する際にマイナス要素になると感じた点があれば、具体的に書くことが求められます。

### ●シノプシスに盛り込むこと(一般例)

- 原題
- 訳題(自分なりに検討してつけた仮タイトル)
- 出版社名
- 出版年(初版が出た年)
- 著者名
- 著者のプロフィール

原書に掲載されている情報や、インターネットなどで調べてわかることを併記。

たとえば、代表作や日本で翻訳出版された作品の情報、受賞歴、本国での評価など。

- 総ページ数
- 概要(本の背表紙にあるような作品の簡単な紹介文)
- 目次(ノンフィクションのみ)
- 主な登場人物(ビジネス書や実用書などの場合は不要)
- あらすじ

シノプシスを読んだ人がストーリーを正しく理解できることが大切。読み手への伝わりやすさを優先するため、ストーリーの順番を多少入れ替えても良い。また、一人称視点で書かれている作品のあらすじは、一人称視点でも三人称視点でも構わないが、どちらの視点で書かれた作品なのか、シノプシスに含めておくと良い。

#### • 所感

感想だけではなく、市場性、類書との比較、ターゲットとなる読者、そのほか特記事項などあれば盛り込むと良い。

# リーディング講座

ミステリー

## MYSTERY



●執筆講師  
越前 敏弥  
Toshiya Echizen

文芸翻訳家。『ダ・ヴィンチ・コード』『Xの悲劇』『インフェルノ』(角川書店)、『マッシュー・シャードレイク』シリーズ(集英社)、『解錠師』(早川書房)など訳書多数。

## II 多読のすすめ

大学時代のわたしは文学や映画のことしか頭になく、ろくに勉強もせずに、同好の士たちと毎日のように夜を徹して語り合っていました。ミステリー小説が好きな連中も多く、たとえば『アクロイド殺し』のトリックがフェアか否かという話題だけでひと晩が過ぎたこともあります。そんな仲間のなかに、飛び抜けて知識が豊富で、つねに鋭い分析をする男がひとりいました。ほかの連中が束になってかかってもかなわなかったのです。ところが、抜群の知識量や読書量を周囲から絶賛されても、その男はあまりいい顔をしませんでした。それどころか、「ミステリーファン」や「探偵小説マニア」などと呼ばれること自体をいやがっているふしがありました。慎重さも度を超すとかえって鼻につくもので、あるとき仲間のひとりが、素直じゃないとかなんとか言って喧嘩を売りました。すると、売られたほうの博覧強記の男は、照れたようにこう答えたのです。「植草甚一の本に“ミステリーを1,000冊読破するまでは、ファンだのマニアだのと自称するな”って書いてあったんだ。おれ、まだ900冊しか読んでないから、名乗れないんだよ」

それを聞いて、一同が愕然としたのは言うま

ジャンルの特徴、読んでおきたい参考図書、執筆講師のアドバイスなどが書かれています。まずは「ミステリー」というジャンルの理解を深めてから、課題作品を読み始めましょう。

く、夜中が仲間内にはいなくなり、ひたすらひとりど1,000冊」をめざしはじめました。もともと、夜通し侃々諤々の議論を闘わせる日々は相変わらずつづきましたが。

こんなエピソードを紹介したのは、ミステリーの世界では上には上がいることを、皆さんにまず知ってもらいたかったからです。銃器や司法制度や軍事組織などについて知悉している筋金入りの読者は、日本中にごろごろいます。翻訳者としては、そのような通の読者を納得させる一方で、年に数冊しか本を手にとらない読者にも配慮しなければなりません。すべての読者を満足させるのは至難の業とはいえ、確実に言えるのは、翻訳者はその時代のスタンダードがどのあたりにあるかを知っていなければならないということです。

たとえば、現在のミステリーの読者に対して、FBIが「連邦捜査局」の略語であることは説明不要でしょうが、ATFと聞いて「アルコール・煙草・火器局」を思い浮かべられる読者はまだ少数でしょう。また、原文に“tommy gun”ということばが出てきたとき、「トミーガン」と「ト